

〔論文〕

保育におけるダンボールカホンづくりによる 幼児の音を遊ぶ姿をどう捉えるか

—小川博久の「遊び保育論」を手がかりに—

横 井 志 保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

本研究は、保育園の4・5歳児を対象に、幼児が日常の遊びの中で自由に音を出すことができるものを一人ずつ所有できるような、ダンボールを素材としたカホンづくりを行い、表現する過程において起きる事象について小川博久の「遊び保育論」を手がかりに検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。子ども集団の同型的応答が成立し、連帯性がつくられることとなり、「あこがれ」の対象となる子どもが現れると、他児はそれに追随し、その憧れの対象となる子どもは遊びを誘発する人的環境となった。また、そこでうまれたノリによって連帯性がつくられ、音楽的な場が成立することとなった。ダンボールカホンをつくる活動は、音を見つけ、子どもたちにイメージの共有がされ、ノリをもたらし、子どもたちに音への興味関心を広げることにつながった。

キーワード：幼児の器楽活動、ダンボールカホン、遊び保育論、ノリ

How to capture the expressions of children playing with cardboard cajons in childcare: Based on Hirohisa Ogawa's “play and childcare theory”

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

発行日 2023年7月31日

1. 問題の所在

(1) 保育において楽器をつくって遊ぶということ

幼稚園教育要領（文部科学省，2017），領域「表現」のねらいと内容には，幼児が生活の中で様々なものに触れ，イメージを豊かにしたり，表現する楽しさを味わうことができるよう，保育者に環境の工夫や配慮が求められている。しかし，保育者らは音楽的な表現の活動をするための楽器や，音を日常的に出して遊べるものが十分でないと感じている現状がある（横井，2023）。また，保育室の環境の構成の一部として，ただ楽器を用意しておけば良いという訳でもない。

幼児に音に興味を持たせたり，器楽活動の導入として手作り楽器をテーマにした研究はこれまでに種々あるが，幼児の身近な素材であるということを理由に，紙コップのマラカス（黒宮，2020），ペットボトルのレインスティック（鈴木，2019），粘土を焼いてつくったクラベス（本田，2019）と，幼児が手に持って音を鳴らすものばかりであった。

保育において，保育者と共につくる「手作り楽器」というと，「音が出るおもちゃ」になりがちで，既存の楽器に見た目を似せた音の出るモノをよく見かけるが，本研究では，幼児が日常の遊びの中で自由に音を出すことができるものを一人ずつ所有でき，更には本物の楽器に近い音や見た目となるような，ダンボールを素材としたカホンづくりを行った。幼児が自分の手で音が鳴るモノをつくることで，幼児の表現は豊かになるのか。また，表現する過程において起きる事象について検討することとする。

(2) 音を遊ぶ姿をどう捉えるか—「遊び保育論」を手がかりに—

保育者と共に行う活動において，保育者の弾くピアノの音に合わせて，近くにいる幼児が手を取り合って歩き出したり，手をたたいたりすることがある。ただ，それが幼児の心が動き，それに伴って動き出した，保育者の意図する動き（行為）でない場合，多くの保育者はそこが音楽的な場となっても音楽的に捉えることが難しい。特に音楽的な表現は，幼児が表現した瞬間に消えていく。そこで，保育者は幼児が音楽的に表現する場をどのように捉えたら良いのか。小川博久の「遊び保育論」（小川，2010）を手がかりに考えてみたい。

小川は遊びを，遊び手が自ら選んで取り組む活動であり，他の目的のためにやる活動ではなく，遊ぶこと自体が目的となり，その活動自体が楽しいとか喜びという感情に結びつき，自ら進んでその活動に参加しなければ，味わうことができないことと定義している。

小川は，かつて遊びは子ども集団において知識・技能（遊び方）を伝承し，子どもたちが自主的に展開する活動であったが，高度経済成長以降の日本において，大人と子どもの生活の区別が失われつつあり，受験戦争が自由な遊び環境を子どもたちから奪っているという。このことから，小川は子ども期から遊びが消えることによって学びへの内発的動機が失われ，学校教育が担っている使命が果たせなくなり，現代社会の崩壊につながる可能性があると主張する。このような危機感から，遊びの発生が子どもの自発性に任せられないならば，遊びが復活するように状況を用意するのは大人の側にありと述べている。そして，そのモデルを，伝承遊びをする異年齢集団を例に，小学校高学年くらいの

子どもが幼児の面倒を見ながら遊び、その中で幼児は年長の子どもに「あこがれ」、見てまねることが、早く遊びを覚え、遊びに加わることを学ぶ。学ぶ側、見てまねる側に学びの主体性、学びの動機がそこにあるという。

小川は、保育における室内遊びにおいて、同時進行で展開する複数の幼児の遊び群の存在と動きを観察の目で見つめ、その状態を把握し、どれに援助が必要かを判断するために最も有利な場所として製作コーナーを挙げている。「見る⇔見られる」の関係において、保育者がモデルという役割を果たすとともに、コーナー同士の活動の賑わいを演出するという具体像が示される。そして、保育者のモデルとして作る行為は、子どもたちの「あこがれ」を生み出し、模倣行動を促進し、遊び活動を促す。この「あこがれ」が、遊ばない子どもを遊びに誘う大きな起点となるという。

また、小川は日本音楽の用語である「ノリ」¹⁾という表現を使い、幼児同士の同調するリズム、身体と世界との関係から生み出される調子、気分によって保育者と幼児集団との連帯性がつくられると述べている。こうした「ノリ」によってつくられた共同体的絆は、保育者と幼児一人一人との絆づくりにも有効であるという。

小川の「遊び保育論」を参考にダンボールカホンづくりに見られる、幼児の音楽的な表現場面の読み取りをしていきたい。

2. 研究方法

愛知県内の公立S保育園において、2022年10月26日から12月2日までに4歳児24名、5歳児25名それぞれを対象に3回の実践を筆者が行った。実践には担任保育士の他に園長等3～4人の保育士と一緒に加わり、実践は1回30分程度行った。

一部を除き実践の経過をビデオカメラで撮影し、補助資料として子どもの音をつくる過程における表現の仕方について分析した。

分析結果については、実践に子どもと共に参加してくれた保育士からの意見を参考に恣意的な分析をできる限り回避した。

《ダンボールカホンについて》

本研究で使用したダンボールカホンは筆者が設計し、ダンボール会社に依頼して製作してもらった。サイズは座面：20cm×20cm、高さ：30cmと、幼児が扱いやすく座って鳴らすことができる高さとした。子どもが自分で作ることを実感できるよう、サウンドホールは実践者ら大人と共にダンボールカッターで開け、響き線は予め竹ひごを使用して実践者が製作したが、子どもがクラフトテープで貼り付けた。成形後、子どもが好きな色のクラフトテープで蓋を留め、様々な色のクラフトテープで好

1) 岩田遵子による「ノリ」の概念のことで、岩田は「「ノリ」とは、関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズム、およびその顕在の程度、すなわちリズム感、また、身体と世界との関係から生み出される調子、気分のことである。」と述べている。(岩田, 2008)

きに装飾をした。

実践の内容は表1にまとめた。

表1 実践の内容

月 日	内 容
10月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本『たいこ』（樋勝, 2019）を見る ・カホンの音を聴く ・一人ずつ試し打ちしたりサウンドホールの中をのぞいたりする ・絵本のストーリーの様に「なかまにいれて」「いいよ」と3人が常時打てるように一人ずつ交代しながら試し打ちする（5歳児のみ）
11月1日	ダンボールカホンづくり（5歳児）
4日	ダンボールカホンづくり（4歳児）
12月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・鈴付きロープを鳴らして保育士のピアノ伴奏によって動く（4歳児のみ） ・自分で作ったダンボールカホンを「お名前なあに」の言葉のリズムに合わせて全員で鳴らし、一人ずつ順に自分の名前を「○○○」と、たたいて応えることを連続して途切れないよう繰り返す ・5人一組で音を鳴らして会話する（始まりと終わりのタイミングは子どもが決める）

- * 1. 10月26日の実践後、年長クラスに使用したカホン1台と絵本『たいこ』を保育室に置いてもらい好きに遊んでもらった。
- * 2. ダンボールカホンを各自つくってから12月2日の実践まで保育時間等に好きに使って遊んでもらった。

3. 倫理的配慮

研究に協力してもらった子どもの保護者と保育士には、研究の趣旨と方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力への自由意思と協力の撤回の自由について文章で説明し、本研究への同意を書面にて得た。

4. 結果と考察

(1) イメージが音やリズムを子どもに掴ませる

筆者は子どもが音に意識を向けられるように、実践の導入として絵本を読んだ。それは、「トントントントン」と犬が太鼓をたたいていると「なかまにいれて」と、次々に仲間がやってきて、ページをめくる度に仲間とリズム（音）が増えていく、といった内容である。絵本は主に左のページにリズム（音）とたたいている絵が描かれ、右のページに加わる仲間と「なかまにいれて」「いいよ」と文が書かれている。

【scene1 絵本のイメージから音楽する5歳児】

筆者が2人目の仲間が加わる場面でリズム（音）を読んだ後、少し間をおくとそのリズム（音）をA子が真似た。続いて、「なかまにいて」を読むと、何人かが「いいよ」と、いつも自分たちが遊びの中で応答している時と同じようなリズムカルな調子で、筆者が読む前に代わりに答えた。ページをめくった次の場面では、リズム（音）を読むと、筆者に続いて皆で声を揃えて真似た。

幼児のリズム（音）の真似と「いいよ」は絵本の最後まで繰り返され、まるで皆で絵本の中に入って仲間と共に太鼓をたたいているかのような雰囲気となった。

その後、実際のカホンを囲んで3人ずつたたいて音を試すよう促すと、絵本の様に順番に「いれて」「いいよ」と言いながら交代しながらたたいていた。

絵本はカホンをたたくことをイメージできるように準備したものであったが、読み始めて直ぐに大きな声で真似し始めたA子をきっかけに子どもたちと共に読み進めることとなった。この絵本はリズム（音）1行を4拍で一まとまりとして読むことができる構成となっており、文字も大小あることから、強弱を付けることができて和太鼓の口唱歌の様でノリをもって読みやすい。

保育において子どもが楽器を演奏する場合、演奏のモデルが必要となる。多くの場合は保育者であろうが、本研究においては、絵本がその役割を果たしたと言える。子どもたちは文字を読んでいたのではなく、筆者の読む音を真似ていたのだが、絵本で見る視覚から得た、たたくイメージと筆者の読む音の、聴覚から得たイメージ。そしてそれを真似て発する自分や仲間の声から受けるイメージと、太鼓をたたくイメージが一人一人の頭の中で膨らむ。直接的な、実際の演奏によるモデルの前に、先ずは間接的にあらゆる角度から演奏のイメージをもつことが、年長児が音やリズムを掴むことになり、その後の表現を引き出すことに繋がる可言えよう。更に、本事例では、子どもたち自身で絵本のように「いれて」「いいよ」と、順番に1つのカホンを使って再現しており、年長児が絵本から受け取るイメージが多岐にわたることが示唆された。

(2) リズムの同期が音楽する場をつくる

実践に際し、自分でカホンをつくることを子どもたちに伝えと、自分で木を切ることが出来るのかと心配する子どももいたが、ダンボールでつくる事が出来ると知ると真剣に、そして楽しそうに製作に取り組んでいた。

【scene2 カホン列車を楽しむ5歳児】

ダンボールカホンを完成させると、片手をサウンドホールに入れて持ち歩きながらたたき始めたB男。筆者に「先生！同じ音するよ！いい音！」と、言うので「ホントだ！いい音するね」と筆者が答えると、今つくったばかりのダンボールカホンの上に座ってたたき始めた。完成させた男児たちが次々にB男の後ろに縦一列に並び、たたき始めると、園長先生の「電車みたいだね」の言葉に子どもたちは、ただニコニコしながらたたき続けた。

B男は自分でつくったダンボールカホンが、以前筆者と一緒にたたいたカホンと同じ音がすると喜んで喜んでいた。子どもたちは自分専用をつくることができたことに満足しているようであった。好きな場所で好きなように鳴らすことができる自作のダンボールカホンだが、一か所に集まり一列になった男児たちは自分の音を確認するようにたたいており、一見するとバラバラのように見えたが、そこには一体感が感じられ、ダンボールカホンで繋がった列車が出来上がっていた。始めは音に注視していたB男であったが、他の子どもたちと共に鳴らし始めると、音に向かって意識は共にたたく楽しさへと変わっていった。聞こえるリズムを真似てたたく、また誰かがそれを真似る、その連続が時に偶然に同期を起こさせ、その持続が音楽する場をつくったのだ。

(3) 劇の効果音となる

12月後半に行われる生活発表会では、子どもたちの創作劇が保護者に披露されることになっていた。劇には恐竜とカマキリが現れて戦う場面があるが、保育者と共に考える過程において子どもたちは自分たちの作ったダンボールカホンを鳴らして効果音とした。

【scene3 恐竜とカマキリの戦う音 5歳児】

劇でカホンを使う場面を見せて欲しいと筆者が子どもたちに伝え、恐竜とカマキリ役の子どもたちと効果音の担当の子どもに分かれて、劇の一場面が始まった。恐竜とカマキリが舞台上に現れて戦う間、効果音を担当する子どもたちは勢いよく思い切りカホンを連打した。恐竜とカマキリ役の子どもたちも、効果音の勢いに合わせて身体を大きく動かしながら演じていた。

子どもたちは自分でつくったダンボールカホンで遊ぶうちに、その音の中に恐竜とカマキリが戦うイメージを見つけたのである。日常の遊びの中にダンボールカホンがあったことで子どもたちのイメージが広がり、恐竜やカマキリ役として動く子どもたちを見ながら、その他の子どもたちはその動きからイメージを共有しながら、この場面の効果音を作り出したと言える。

総合考察

以上の実践事例を、小川の「遊び保育論」の観点から考察する。

絵本を見ながら、その絵本の世界の中で音楽する子どもたちは、絵本の持つリズムと、実践者である筆者が読むリズムにノリ、そのノリによって筆者と子ども集団との同型的応答が成立し、小川の言う身体的機制によって連帯性がつくられることとなった。また、最初に筆者の真似をして文中のたいこのリズムを発声したA子は、ここでは他児に見られる側の保育者的な役割をしており、A子は「あここがれ」の対象となり、他児はそれに追従した。ここでは、A子が遊びを誘発する人的環境となったのである。

また、カホン列車の事例の場合も、B男一人で出来上がったダンボールカホンで遊んでいる姿を他

保育におけるダンボールカホンづくりによる幼児の音を遊ぶ姿をどう捉えるか

児が見ることによって、「見る⇔見られる」の関係ができ、そこに「あこがれ」が生まれ、B男と共にダンボールカホンをたたく男児らの遊びは継続し、そこで生まれたノリによって同型的同調が成立し、連帯性がつくられることとなった。この連帯性によって、更にカホン列車のリズム打ちは持続し、音楽的な場が成立することとなった。

劇の効果音の事例においては、クラスの子ども全員が遊び環境の構成員となり、保育者やクラスの仲間と共に行う劇でダンボールカホンの効果音を創り出し、一体感を醸成していた。小川によると、保育者が表現者となり、その動きを幼児が「見てまねる」。そして、すべての幼児が表現者になり幼児同士お互いに「見てまねる」という学びが成立するという。

ダンボールカホンを子どもそれぞれがづくり、そこから音を見つけ出し、劇中の一場面の動きに合わせて鳴らすというのは、子どもたちにイメージの共有がされ、ノリが頂点に達した状態となったと言える。

まとめ

ダンボールカホンづくりの実践から、以下のことが明らかとなった。

本研究の実践では保育者だけが「あこがれ」の対象となるのではなく、クラス集団の中の誰かがやってみたくなる（まねしたくなる）ことをし始めると、それを見た他児がまねしはじめ、またまねされた子どもがそれをまねる。その繰り返しによってクラスの一体感となりノリが喚起される。

さらに、そのノリは音楽的な場をつくりだす。また、ダンボールカホンを自作することは子どもに音への興味を広げることに繋がった。

謝辞

楽しく参加してくれた子どもたちと先生方、製作と試作に長時間ご協力くださったダンボール会社の皆さんに感謝致します。

参考文献

樋勝朋巳（2019）『たいこ』福音館書店

本田郁子，笹谷朋世（2019）「保育現場における造形表現と音楽表現の連携による表現活動指導法に関する研究Ⅰ—造形表現を中心とした考察—」名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター 子ども学研究論集11 pp. 61-73

岩田遵子（2008）「県立新潟女子短期大学付属幼稚園樋口嘉代教諭の実践に学ぶ 逸脱児が集団の音楽活動に参加するようになるための教師力とはなにか—ノリを読み取り、ノリを喚起する教師力」音楽教育実践ジャーナル vol. 5 no. 2 pp. 12-13

黒宮可織，鎌田千佳，二見美千代（2020）「幼児の探索的な活動に関する研究—こども園における手作り楽器のワークショップを事例として—」音楽教育メディア研究6 pp. 57-68

名古屋学院大学論集

文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』

小川博久（2010）『遊び保育論』萌文書林

鈴木由美子（2019）「「手づくり楽器」による子どもの感性，表現へのアプローチ」千葉敬愛短期大学紀要41 pp. 29-38

横井志保（2023）「保育者の音楽に対する苦手意識を払拭する試み—ワークショップ参加は意識をどのように変えるのか—」名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇59(2) pp. 17-25